

道はちか邇しといえども

行かざれば至らず

— 荀子 —

昨年八月、友愛婦人会から友愛についての卓話を依頼されました。思うままを、話させて頂きましたが、それを補足し、小生の友愛感として書いてみました。ご高覧いただけますれば幸甚です。

平成二十四年三月三十一日

一般財団法人 日本友愛協会

常務理事 川手 正一郎

友愛とわたし

「友愛婦人会卓話」に補足して

—平成二十三年八月四日 椿山荘—

川手 正一郎

はじめに

友愛については、ここに居られる皆様方はご存知の方ばかりですので、全てご理解されているものと思われませんが、私なりの意見を述べさせていただきますと存じます。

先日の日経だったと思いますが、平塚らいてうの『青踏』発刊の言葉が書いてありました。

「元始女性は実に太陽であった 真正の人であった」と記されていました。青踏社は明治四十四年（一九一一年）の創設だそうです。

当時、明治から大正にかけての時代は「男尊女卑」ではありませんが、そんなムードがあり、女性解放を目指した平塚らいてう、与謝野晶子、山川菊江、伊藤野枝等々、女性の新しい時代を探求していた時であったと思います。

そんな百年前に比べて、今、女性の皆さんの立場はどうでしょうか。戦後女性の地位は、参政権はじめ、すべての面で大きく変わりました。特に本日、ご列席の皆さんは「元始女性は実に太陽であった」以上に常に「中天に輝く太陽」であります。我が家の太陽は朝から真昼の太陽で、夕日に向う翳りはありません。後期高齢期を迎えたこの頃は、その輝きが一層眩しい限りです。ここにお出でになる皆様のご家庭は如何でしょうか。一番輝いて居るのは、皆さん方ではないでしょうか。それぞれのご家庭内が目に見えます。

家康の人生観

日曜日NHK大河ドラマ『江』を見ましたが、その中にこれほど感心した言葉がありました。お江さんが、秀吉に秀忠（徳川秀忠・第二代將軍）のところにお嫁に行くよう何度命じられても断り続けておりました。お江さんは二十三歳、秀忠十七歳、六歳も違う年令。どうなることかと見ていましたら、ある日家康がお江さん呼びました。そして、お江さんに「あなたには宝を持っているような気がする、その宝をわが徳川家に下さりませぬか」と話しかけました。この言葉にさすがのお江さんも娘のお貞を淀君に預け、秀忠のもとに嫁ぐ決心をしました。女性の心を拓くには素晴らしい言葉だと思います。そしてその時感じましたのは、杜鵑の諺でし

た。信長は殺してしまえ、秀吉は鳴かせてみよう、そして家康は鳴くまで待とうホトトギスでした。この諺の底流にあるのは、信長は利己、秀吉は自利、そして家康は利他ではないかと想いました。その家康は「己を責めて他人を責めるな」という言葉を残しておりませんが、この言葉のベースは互惠的利他であり、我が身を抑制して他を思いやる心です。そして、徳川三〇〇年の歴史は、この家康の哲学に在る、そんな感じがした大河ドラマでした。

友愛三原則の基本理念

そこでその利他について小生なりに考えてみました。利他とは、自分以外の他を認識すること、他を思いやること。広辞苑では、「自分を犠牲にして他人の幸福を願うこと」そんな解説がされていますが、論語の「仁」と相通

ずる思想でもあると思います。そして、その思想は、鳩山一郎の思考の原点である、人間の人格の尊厳を尊重するという考え方そのもののように思いますし、それが友愛発想の出発点であると思います。その後、鳩山はこの友愛を具現化するため、三つの言葉を提唱しました。その三つの言葉とは人間としての人格と互恵的利他をベースにした「相互尊重、相互理解、相互扶助」の考えであり、これを我々は「友愛三原則」と称し、友愛創立以来全ての羅針盤とし、今日に至りました。

鳩山一郎がこの友愛三原則を提唱する切っ掛けとなりましたのが、クーデンホフ・カレルギーの著書『全体主義国家対人間』（鳩山一郎訳『自由と人生』）の中の「友愛革命」の章に述べられている友愛主義であります。クーデンホフ・カレルギーは友愛主義や友愛社会について、母性愛を核心とする紳士、淑女の社

会であり、自由と平等を結ぶ絆と強調しておりますが、この考え方も基本は利他であり、他を認めることであります。鳩山一郎の友愛三原則は友愛の原典であり、既に皆様は充分ご理解いただいて居ると存じますので、カレルギーの母性愛について、私なりの考えをお話ししてみたいと思います。

母性愛とは

私は一歳の誕生日を迎える数日前に母を亡くし、真の母性愛とは何か良く解りませんが、ここに居られる皆様はみな母親ですので、母性愛など話す必要もないかも知れません。釈迦に説法と思いますが、3月11日の震災時、我が子や孫を亡くした母や祖母の悲しみの言葉の中の、異口同音、自分が代わってあげたかった、なんとしても助けたかったという

切々たる思いと姿に感動したのは私ひとりではないと思います。その本音は我が子の為には自分の命を惜しまない、そしてそれが母性愛の根源だ、という思いに至りました。

紳士・淑女の社会

皆様、母親として如何でしょうか。またカレールギーは、友愛社会を紳士淑女の社会と記しておりますが、その紳士、淑女について皆さんはどうお考えでしょうか。勿論ここに居られる皆様は全て淑女であり、それなりにご理解されて居ると思いますが、カレールギーは紳士と淑女について次のように述べています。「即ち紳士とは、発達した人間を作ることを理想としている。これは同時に名誉と形式の理想でもある。形式の整わない名誉の人は紳士ではない。形式が整っていても、名誉に欠

けている人は紳士ではない。粗暴漢、無頼者等とは正反対の地位にある教養のある人の義である」と説いて居ります。

また淑女については「一部の女性的道德の清粹なのである。淑女は道德と美的価値をもに兼備する」と述べて居ります。

淑女については、先程も申し上げましたが、ここに居られる女性の皆様全員ですので、私からは説明致しません。そして、紳士については、私自身、紳士と思っておりますので、具体的に説明できません。そこで敢えて私なりの見解を申し上げるとすれば、城山三郎の小説に出てくる「私は粗にして野だが卑ではない」という国鉄総裁石田礼助の言葉が紳士としての私の鑑であり、紳士の基準はこの辺りが境目のように思っております。

孔子は「七十にて心の欲するところに従いて矩を踰えず」と記しておりますが、小生には

大きな距離があるように思います。果して皆様がどうお考えでしょうか。世の中の全ての人が紳士や淑女になりませんか、友愛社会の実現などと言えないし、そういう観点から現在の社会を考えますと、まだまだ道遠しというところですが、できるところから徐々に拓いて行きませんか、全てを一度に変えることは至難のことと思います。

友愛的思考の芽生え

3・11以来、日本では自助・互助・公助などの言葉が俄に注目を集めました。この思考の根底も友愛思想の一端であり、また鳩山由紀夫首相時代、新しい公共や地域主権、そして東アジア共同体という日本の将来像が示されましたが、この基本理念も友愛の思想をベースにしたものであり、このような相互扶助

の傾向は、これからゆっくりと地域社会に浸透し、富士山の湧水ではありませんが、やがて至るところで自噴してくるものと想われまします。そしてそれが友愛社会形成の端緒となり、人間の幸せや世界の平和について真摯に取組む土壌が生れ育まれるものと信じます。当時のマスコミはこの真の意味を理解せぬまま痛烈な批判ばかりしておりました。

友愛は自由と平等を繋ぐ絆か

また、カレルギーは「友愛は自由と平等を繋ぐ絆」と述べていますが、考えてみますと自由と平等とは対極にあり、簡単に言えば、自由とは強い者が勝つこと、そして平等とは弱い者を扶けることですので、この全く相反する考え方を友愛は繋ぐことができるのか、理念と現実の相違をどう解決するのか、友愛に

とつての現実面での大きな課題でもあります。友愛最大の問題は利己や自利をどう利他化していくかということですが、これは自分自身を自らコントロールしなければならず、そんな神のような人間が育成できるのかどうか。そしてそこまで突きつめていくと、不可能、無理、諦めの境地に落ち込み、問題解決の道は見えなく現実の厳しさに直面します。しかし、それで諦めては世界の平和や全人類の幸せは未来永劫、実現不可能であり、人間社会に争いや戦は無くならず、人間の利己重視はやがて自然破壊を促進し、自らを自然淘汰の対象とし、自滅していかざるを得ません。人間と動物の大きな違いは、人間の母性本能による利他の心が全ての人間にあり、環境如何によってその萌芽が醸成される可能性を秘めているということです。文明の発達や自然界の変化は、一定条件を越

えると核や天災と同じく人間の進歩を害するものもあります。しかし自然も科学も多くの場合、人間の精神的成長に資するものであり、それによる環境や価値観の変化が、人間の本能に大きな影響を及ぼし、利他育成に効果的に働くことは、自然と科学の同時激変をもたらした3・11後の日本人の心境変化に現れつつあるように想われます。3・11以後の絆や連帯、そして近年中国における調和や和諧という考え方の基軸も、原点は互恵的利他であり、すべて友愛と共通する基盤であることは説明するまでもありません。

友愛の原点と政治

また、鳩山由紀夫元首相の友愛もそういう原点をしっかりと把握されての発言であります。一部のマスコミ等の曲解により、思わぬ解釈

となつてゐることは極めて遺憾であります。では、友愛という理念はマスコミが批判するようなそんな安易な言葉や思想でしょうか。カレルギーは母性愛を核心とすると記しましたが、その母性愛とは、前述しましたが我が子の為には命を惜しまないという断固たる決意を根にした理念であります。そして、その理念から発想する政策は、互恵的利他を幹とする社会政策であり、外交や国益についても、その根幹として不可欠の思考だと思ひます。鳩山由紀夫首相の時代、友愛と現実の政治について、友愛のような甘い理念で政治ができるのか、具体的政策、外交とくに国益について一斉に批判や非難をされました。

個人と集団の矛盾

しかし、人間は個人と集団ではその思考が全

く異なる部分があり、その点についてリーダーは人間の幸せや平和について何が基本か、しつかりした理念を確立しなければなりません。

個人と集団では考え方が全く逆転するケースとして、平和に対する考え方があります。平和の為に戦う軍隊、そして自国防衛の為の軍隊、真の平和は武器によつてもたらされるという論理が現在多くの国家の大前提ですが、平和と武器は対照的であり、全く相反する思想の共存であり、現代社会の矛盾です。大国は何故平和を唱えながら、核戦略を進めなければならぬのでしょうか。多くの人は、この絶対的矛盾に気付きながら、真の問題解決を図ろうとしません。各国の武器競争は常軌を逸し、止まる所を知りません。

歴史は繰り返すという言葉がありますが、これは、文明はどんなに発達しても、人間は全

く進歩しないという証明ではないでしょうか。キリストや釈迦、そして孔子の思想を上回る考え方や、哲学が発生しないのも、その証明ではないでしょうか。

これからの社会、一〇〇年後、二〇〇年後、人間が進歩せずに生存し続けるとすれば、人間は動物と違い、同じ人間を大量に殺すことができる動物ですので、過去にない大きな人間自身の殺し合いが始まる可能性を否定することは出来ません。

次世代に対する責任と使命

科学の進歩と人間の共存共栄の考え方が比例して進化できれば、人間自身に内在する矛盾も自ずと変化して、互恵的に利他化していくものと想われますが、人間の寿命は限られており、どんな崇高な理念や叡智も一代で終り、

次の世代に接木することはできません。カントはこの点についていみじくも次のように人間を喝破しています。

「人間の寿命は長くはない。老年に達した聡明な研究者が、いざ人生最大の発見をしようとする間に老衰が始まる。そして文化発展のための貢献は、次の世代に委ねることになる。次の世代は、白紙の状態からやり直し、前の世代が歩んだすべての道程を再びたどり直さねばならない。人類の進歩は、このように絶えず中断されるのだ」(『超訳カント』)と述べています。

幸せや平和を望みながら人間が自らの欲望を断ち切れぬ悲劇は、このような人間そのものの性にあるのです。しかし、自らの性を熟知し、次世代に真の平和や自然を伝承していく人間としての責任と使命を、人々は意識すべきであり、特に世界のリーダーはその原則を

しっかりと把握して次世代に対し、自らの責任を果すべきと信じます。

人間自らの矛盾をどう解決するのか

それでは我々人間はこの現実を直視し、そして脱却する為に、どんな生き方、考え方をしなければならぬのでしょうか。それは対極にある「自由と平等」をなんとしても並行して実現していく以外に問題解決はあり得ないのです。その鍵が互恵的利他をベースとする友愛です。社会に友愛の理念が浸透し、友愛化が伸展していくこと。その環境が現実のものとなること、そしてその氣運が昂まることよって、自由と平等が並列し、友愛が自由と平等を繋ぐ絆として認知されていくものと思えます。

「理想や思想が現実のものとなるのかどうか

は、その理想や思想を信ずる人の数による。その理想や思想を信ずる人が多ければ多い程、その理想や思想は実現する」とカレルギーは彼の著書で述べています。

人間が将来その生存や平和を

どう希求して行くのか

文明の進歩は人間の欲望と同じく無限大となり、終りはありません。しかし人間自身の欲望をコントロールできなければ、人間以外の自然はどうなるのでしょうか。各国が国益を最優先し、人間個人の尊厳を尊重することを疎かにしたら地球はどうなるのでしょうか。過去一〇〇年の地球の変化を、現在は一年で費消しているという科学者も居ります。そんな環境悪化の時代でも、人間の愚かさを繰り返さねばならぬとすれば、人間の将来は暗澹

たるものであり、人間の子孫に対する責任は
どうなるのでしょうか。

カレルギーや鳩山は、人間の将来を拓くため
に友愛を唱え、世界の人類に覚醒を促したの
です。カレルギーはその具体策として、EU
の原点となりました汎ヨーロッパを提唱した
のです。今、EUは大きな試練の時を迎えて
いますが、将来の世界と人間の在り方を証明
すべく、加盟各国は、全力で問題解決に協調
協力するものと想われます。

自由と平等は友愛で繋げるかどうか

友愛が自由と平等を繋ぐ絆となるのかどうか。
言い方を変えれば、自由と平等を繋ぐものが
なければ、人間の幸せや、真の平和の到来は
あり得ないので、人間の究極の課題はこの問
題の解決であり、それが人間の新しい世界の

始まりとなるのではないのでしょうか。

人間が一時も早く、この点に気付き、地球上
の多くの犠牲を一日も早く止めること、そし
て新しい世界観を打ち立てることが、世界の
平和を確立するものと確信します。

友愛が自由と平等を繋ぐ絆となるのかどうか
は、人間がその重大さに人間として、同時に
国家を構成する人間として気付くかどうか。
加えて各国の政治家はこの問題を具体的にど
う解決しようとするのか。個人としても公人
としても、政治家はこの点について充分理解
し得心しているものと思います。しかし決断
できないのです。それは眼前の国益を守るこ
と、更に少しでも自国に有利にしなければ、
自らの将来があり得ないという強い危機感が
払拭できないからなのです。その原因は、過
去の歴史や自国の利害について、他国の首脳
や国民を信頼できないからだと思えます。

世界は除々に変化する

そして友愛化してゆく

これから通信や交通がますます発達し、それぞれの文化が理解され、人間の交流が進み、他を認める互恵的利他の思想が、世界の人々の間で醸成される時代になれば、指導者如何に拘らず、世界の人々は変化し、友愛化するのです。今迄、どうにもならないと考えられていた価値観が、一挙に瓦解せざるを得ません。ソ連崩壊や東西独逸の併合を体験し、またエジプトやリビアの現状を鑑みれば、大統領や首相の思惑と人間の平和思考は大きく乖離し、人間本位の幸せと平和がやがて現実のものとなることを信じます。人間は今こそ将来子孫の為に、真の平和を希求しなければならぬ時ではないでしょうか。人間が友愛を原点とした思い遣りの心を保ち、人間以外の

自然を含め、全てと共存する具体的な行動に移る時、国家のリーダーは相変らず武器で平和を訴え続けることと思いますが、そんな国家であっても国民は国家を超えた人間として友愛の絆を強くすることが、社会や国家の友愛化をすすめる、やがて国家のリーダーを自覚めさせるようになると思えますし、どんな政治家でも平和をどう実現するかという共存共栄の思想は、人間として当然具備しているものと想います。

世界のリーダーの責任

遠からず人間は自分自身の欲望をどうコントロールするのか、またコントロールしなければならぬのか。そしてそうすることが人間に差別と格差を無くし、平和をもたらす唯一

の手段であることに気付く筈です。21世紀、人類最大の課題は、まさにこの問題にどう対処するか。人種、民族、国家、宗教、言語、階級、職業等々の隔壁をどう取り除くのか。これは人間自身の欲望をどうコントロールするかにしかその解決の道はありません。世界のリーダーは自らの責任において世界の人間の共存共栄の理想を実現する責任があり、今がその最重要期であるように想います。



一般財団法人 日本友愛協会

〒112-0002

東京都文京区小石川1丁目10番地13号

電話：03(5684)3188 ファックス：03(5684)3186

ホームページ：<http://yuaikyokai.com>

友愛のロゴマーク

左はYであなた (You)、右はIで私 (I) を表現し、二つが一つになったWは、私たち (We)、世界 (World) を表している。